『同神期報』100 周年を覚えて

DoShinKiho

同 神 期 報

同志社大学神学部・大学院神学研究科
https://theo.doshisha.ac.jp/

第100号
2024年3月20日発行（創刊1923年）
発行人：小原 克博
編集者：村山盛葦、中野 泰治、三輪 地塩
発行所：〒602-8580
京都市上京区 今出川通烏丸東入
同志社大学神学部

同志社大学第35代学長就任にあたって
―同志社と神学部―

小原 克博

同志社は2023年に150周年を迎えます。同志社英学校が設立された翌年の1876年、熱心からなって来た20余名のキリスト者学生を迎えて「余塾」をつくり、神学教育の授業を始めました。これが神学部の起源であり、神学部は同志社とは切っても切れない関係を有しているだけでなく、その精神的支柱であり続けてきました。戦後の同志社大学は、今出川校地を拠点に、遠くは6学部（神学部・文学部・法学部・経済学部・商学部・工学部）体制でしたが、1986年に京田辺校（現・京田辺校地）が開校し、その後、医歯や学部・研究科の新設を経て、現在では14学部、16研究科を擁する大学へと規模を拡大してきました。学部と大学院を合わせると、3万人弱の学生が同志社大学で学んでいます。

大学が大きくなることのメリットはもちろんあります。しかし、どのような組織も形骸化しないためには、スケール・メリットを享受すると同時に、大きくなったがゆえのスケール・デメリットを意識する必要があります。二つの戦争に分かれ、組織が肥大化・複雑化する中、大学全体が一体感や理念を共有することは、とても難しくなっています。それゆえに、150周年という大きな節目を迎えようとする今、同志社大学が、キリスト教主義をはじめとする設立時の理念や精神を再確認し、私学のイデンティティを新たな装いで共有することは、とても大切です。新島襄が書状（1890年）に残した底めの言葉「同志社は微（さかん）なるに従い、機械的に成るるの恐れあり。切にこれを成様すべき事」は、今の時代においてこそ、深く噛みるべき教訓を持っています。

私は2020年度から4年間、学部長を務め、神学部の発展のために微力ながら努めてきましたが、同時に神学部の存在が同志社大学の中で正しく認識され、同志社の精神的支柱としての役割を果たすことができるように心を砕いてきました。

2024年度より、私は同志社大学第35代学長に就任します。同志社創立150周年という大きな時代の節目にさち合う学長として、同志社を同志社たらしめる精神に立ち返り、人と社会に仕え、新たな価値を発見・実践できる大学となるよう尽力したいと考えています。

神学部教員が学長になったのは、大下角一氏（学長在任期間1954～60年）以来、約70年ぶりとなりますので、「なぜ神学部から？」という声もあるようです。私が学長に就任することは、短期的に見れば、神学部に対し、学部内業務を十分に負えないことから、ご迷惑をおかけすることになります。しかし、長期的に見た場合、同志社における神学部の確立とオリジョンが結実され、「神学部あっての同志社」と多くの方に言っていただけるよう、学長としての職務に全力を尽くしたいと考えています。また、長期的な教育プログラム・研究プロジェクト、文理融合や産学連携、各種メディアを通じた発信など、私が注意をする領域でも、引き続き、同志社のために学術を発展していきたいと思っています。

私が掲げているビジョンは「同志社ルネサンス」です。150周年は、同志社にとって新たな創造の時となります。変化の著しい現代世界の荒波の中でも、同志社は「聖書信仰」「良心」「自由主義」「開国大胆」などに新島襄に由来する国際の価値を持って、基礎べき基盤を見出すことができるポテンシャルを持っています。これは他大学に真似のできない強みであるとも言えます。今うたった同志社オリジンを「再発見」「再解釈」し、進化社会をリードする新しい価値を生み出すことができれば、それは「同志社ルネサンス」（同志社の再興・再生）となります。同志社が比類なき輝きを放ち、「地の塩」「世の光」として社会に貢献する新時代を切り拓いていきたいと願っています。

これまで同僚のご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

同神期報 No.100 1

『同神期報』100 周年を覚えて。創刊日は 1923（大正 12）年 8 月 1 日で、その 1 か月後関東大震災（1923 年）、そして治安維持法（1925 年）、15 年戦争（1931 年から 1945 年）へと時代が激動していきます。

創刊号の巻頭言において、芦田慶治は、コンスタンティヌス帝（在位 306-337 年）が新帝都をビザンティウムに建てようとしたとき、まず建築技師の養成から手始めをしたことに触れ、コンスタンティヌスの苦節は察するに余りあると述べています。芦田は、当時の日本のキリスト教会の現状を「特徴的な精神界の偉大な建築師」がまだ出現していないと憂い、狂瀾怒濤の迫害と逆境における先人の惨憺たる苦心努力・犠牲に敬意を払いつつも、キリスト教会のために「人間建築の技師」たる「説教者、神学者、文芸家」の養成が喫緊の課題であると明言しています。そして、少なくとも 2, 30 年後には「同志社神学校」が「精神的宗教的文化の中心」であらねばならないとヴィジョンを語っています。

しかし、その 20 年後戦火の激しさとともに同紙は 1943（昭和 18）年から 1947（昭和 22）年の 5 年間休刊となってしまいます。その後 1948（昭和 23）年に戦後再刊行の初号が発行されました。その前年は文学部神学科から（旧制）神学部に改制され、神学部として新しいスタートを切っていましたので、その号の冒頭では「新しき神学部の構想」として大学院に 5 つのコースを設けることを記しています（実践神学専攻、農村伝道専攻、神学専攻、宗教教育専攻、基督教社会事業専攻）。学部・学科のカリキュラムは時代のニーズに合わせて適宜改変されていきますが、各コースで目指された人材育成の目的は現在にいたるまで大切に継承されてきています。その後月日を経て 1994 年（71 号）に用紙のサイズが A4 になり、2000 年（76 号）以降は、紙面が白黒からカラーとなり現在にいたっています。

これまで学部・学科の教育活動、教員の研究状況や大学院修了生の消息など種々の内容がスナップ写真とともに紙面を飾ってきました。今後も神学部のリアルを伝えるべく、同紙は役割を果たしていくことになるでしょう。創刊号の巻頭言で示されたヴィジョンを胸に抱きながら「人間建築の技師」たる人材を育成していけるよう、神学部の日々の教育・研究に従事しその責務を果たして行きたいものです。

（村山盛葦）

協力：神学部研究室